

行動するヒロインと帰郷者の誤算：牧歌的ロマンスから田園の悲劇へ、ハーディの『帰郷』再読

今村，紅子
九州大学大学院：博士課程

<https://doi.org/10.15017/1909527>

出版情報：九大英文学．58，pp.19-36，2016-03-31．九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

行動するヒロインと帰郷者の誤算―

牧歌的ロマンスから田園の悲劇へ、ハーディの『帰郷』再読¹

今村紅子

序

『帰郷』(*The Return of the Native*, 1878)は、トマス・ハーディ(Thomas Hardy)が芸術作品を目指し三一一致の法則²を取り入れて、エグドン・ヒース³の自然を背景にエグドンの村に生きる人びとの姿を描いた壮大な悲劇作品である。ヒロインのユーステイシア・ヴァイは、閉塞感ある荒野の生活から脱して、都会の華やかな生活に憧れる美しく情熱的な女性である。クリム・ヨーブライトが、パリからこの村に「帰郷」する噂を聞きつけると、たちまちこの見知らぬ青年に自分の未来をゆだねて、恋心を抱いてしまう。クリムの「帰郷」をきっかけに、ユーステイシア、居酒屋の主人デイモン・ワイルディーズ、紅殻屋のディゴリー・ヴェン、クリムの従妹トマシシら村人たちの夢や情熱、野心などが複雑にからみあいながら偏狭な地域社会の人間関係がエグドンの永劫性とは対照的に変化していく。荒野の異端児ユーステイシアがエグドンを脱出する夢は潰えてしまうが、当時の社会制度のなかで女性が行動し、自力で人生を切り開くことには困難さが伴った。ヒロインが運命に翻弄されながらも「理性」と「感情」のせめぎあいのなかで、もがき続ける姿には意思

¹ 本稿は2015年11月28日、日本ハーディ協会第58回大会(於戸板女子短期大学)での研究発表原稿に加筆、修正を加えたものである。

² 本格的な悲劇作品を目指してハーディが踏襲したのが「三一一致の法則」である。舞台はエグドン・ヒース、時間は1842年11月5日から1843年の11月6日までである。筋の一致はユーステイシアのエグドン脱出をめぐる苦闘が主題となる。

³ 『帰郷』の悲劇の本質ともいえるエグドン・ヒースの果たす役割は大きい。エグドンは自然の力の偉大さを表すばかりではなく、人間の本能や情念を表象する。D.H.ロレンスはエグドン・ヒースの生命力や悲劇の舞台としての意義について『トマス・ハーディ研究』(1985)で論じている。

の力を感じることができる。一方で、内的葛藤を抱えながらも理想主義者であり続けた帰郷者クリムが、村人への啓蒙活動に挫折するに至った、苦悩する現代人としての意識も注目される。本論文ではこのように行動しようとして挫折するユーステイシアと、啓蒙活動に挫折し苦悩するクリムの二人の誤算の悲劇が、田園を背景にいかにか描かれているかに注目しながら、牧歌的口マンスを描く作家からのハーディの変貌の一端を明らかにしたい。

I. 行動するヒロイン、ユーステイシアの誤算

ユーステイシアのエグドン・ヒースでの姿は、望遠鏡と砂時計⁴を持つ「夜の女王」として描かれており、荒野の篝火とともに現れる魅惑的な存在として読者に強烈な印象を残している。ギリシア系の父方の血を受け継ぎ、歓楽地バドマスで育った情熱的なユーステイシアにとって、エグドンは「冥界」であり、悪夢のような閉塞感があった。エグドンの荒野に抑え込まれたユーステイシアがその情熱の発露として見出したのは、誰かに「気も狂うばかりに愛される」恋愛による現実逃避だった。

To be loved to madness — such was her great desire. Love was to her the one cordial which could drive away the eating loneliness of her days. And she seemed to long for the abstraction called passionate love more than for any particular lover. (*The Return of the Native* 71; I .VII)

ユーステイシアがエグドンの丘の頂に立ち、大地と天空の中央で地面と一体となり、恋人デイモン・ワイルディーヴとの逢瀬の合図に篝火を焚く姿は、ギリシア神話のプロメテウス、神への反逆者の姿に喩えられてきた。(Boumelha, xxxi)神話の英雄プロメテウスは地上の人間のために天界の火を盗み、ゼウスによって永遠の罰を受ける。ユーステイシアはエグドンに捉われた自身の運命を天に呪う反逆者であり、理性を超えた抗いがたい恋愛の情熱に翻弄される人物でもある。ユーステイシアにとって反抗と情熱の象徴であ

⁴ 祖父のヴァイ大佐に連れられてエグドンにやってきた「侵入者」であるユーステイシアの砂時計は、女性に与えられる時の儚さを、望遠鏡はエグドンの外の世界へのユーステイシアの関心や村人との距離、主観的世界観へのこだわりを投影している。

る火は、エグドンの大地と篝火の関係と同様に切り離すことができない。エグドンの篝火が冬とともにもたらされる暗黒の混沌に対して、人間がおこす本能的な抵抗であるように、ユーステイシアの焚く篝火は彼女のやむにやまれぬ反抗の篝火なのである。そのようにエグドンに反抗しようとしながらも、恋の業火に身を焦がし死にゆくユーステイシアは、火の魅惑に抗えず炎に飛び込む蛾のイメージと重ねて解釈されてきた。⁵ユーステイシアにとっての恋愛は、個人と向き合う愛ではなく、愛されることで現実を忘れたいという独りよがりな欲望に基づいている。エグドン・ヒースでの孤独な生活は、ユーステイシアにまだ見ぬ相手に恋い焦がれる刹那的な恋愛感情を燃え上がらせた。凡庸な生活から自分を外の世界へと連れ出してくれる理想像を男性に仮託する、恋に恋するヒロインがユーステイシアなのである。⁶

このように、美しく情熱的なユーステイシアが単調な日常から逃れるためにワイルディーヴと恋愛にふける様子や、辺鄙な片田舎から都会への脱出する手段として、恋愛や結婚を考える彼女の目論見に、当時出版された『アシニウム』誌は手厳しい批評を下している。

But one cannot help seeing that the two persons in question know no other law than the gratification of their own passion, although this is not carried to a point which would place the book on the 'Index' of respectable households. At the same time it is clear that Eustacia Vye belongs essentially to the class of which Madame Bovary is the type; and it is impossible not to regret, since this is a type which English opinion will not allow a novelist

⁵ The moth made towards the candle upon Eustacia's table, hovered round it two or three times, and flew into the flame. (264; IV.IV) 篝火とともに蛾も逢瀬の合図のひとつだった。ワイルディーヴは荒野で捕まえた蛾をユーステイシアの家の窓辺で放ち、自分が会いに来たことをこっそり知らせようとした。

⁶Penny Boumelha は、フロベールの『ボヴァリー夫人』(1856)やトルストイの『アンナカレーニナ』(1877)を『帰郷』と同様のテーマを扱った作品として提示した。いずれもヒロインたちは、夢見がちで幻想に憧れる女性で、息の詰まりそうな田舎暮らしや、偏狭なコミュニティの口やかましい人びとの監視の目から逃れられない生活に苦悩している。ユーステイシアもボヴァリー夫人同様に、都会と田舎、ロマンスと倦怠、魅惑と凡庸の狭間で苦しんでいる。

to depict in its completeness, that Mr. Hardy should have wasted his powers in giving what after all is an imperfect and to some extent misleading view of it. (*The Athenaeum*, November 23, 1878)

『アシナム』誌では、ユーステイシアとワイルディーヴの関係は欲望で結びついた以外の何ものでもないということ、ユーステイシア・ヴァイという女性はボヴァリー夫人を典型とする種類の女で、英国的な考えからすれば、作家には書いてほしくないタイプの女性像であるとして、作家ハーディへの批判めいた言及さえ含まれていたのである。しかし、19世紀の社会制度を考えてみれば、女性が行動し、人生を切り開くには、社会的な活動領域を伴う男性の力なくしては、女性が生活環境や階級を変えることは不可能に近かった。都会の華やかな生活に憧れるユーステイシアが、女性と金にだらしないワイルディーヴとひととき恋に落ちたことも、パリで宝石商になったクリムの帰郷に色めき立って恋に落ちたのも、けっして浅はかな行動であったとはいえない。田舎での凡庸な倦怠から抜け出して、ロマンティックなパリでの魅惑的な生活を実現させる野望がそこにはあったのだ。女性が偏狭な世界から逃れて、新たな冒険や逃避をするためには、世界とつながる男性と恋に落ちて愛されることが自己実現への近道であるとユーステイシアは理解していた。エグドンの荒野での焦燥感と徒労の日々に培われた、愛を求める「感情」と都会での自己実現を望む「理性」が、最終的にユーステイシアとクリムとの結婚へとつながったことはいまでもない。

しかし、ユーステイシアの抱いていたクリムへの恋愛感情は、想像力や幻想に基づいたもので、現実的な恋人(夫)の人間性の理解に至らなかったことは致命的だった。一定の距離があったときは輝きを放っていた二人の関係は、ひとたび恋愛から結婚生活の現実が見えると、あらゆる面で綻びをみせて幻滅に終わる。⁷都会での華やかな生活を求めていた妻に対して、虚飾のパリ

⁷クリムとユーステイシアの結婚では、互いの理想のずればかりではなく、それぞれの家柄や階級についての衝突があった。牧師補の娘であることを誇りとするクリムの母親ヨーブライト夫人は、出自や階級のこだわりが強く、姪のトマシと居酒屋の主人ワイルディーヴの結婚にも反対していた。クリムとユーステイシアの結婚の際にも、ヴァイ家とヨーブライト家の階級理解について見解の相違が表面化した。エグドンの

のむなしさを悟って帰郷した夫は、エグドンの人びとの啓蒙活動や教育に夢を見出していたのである。妻の不満をよそに読書にふけり眼を悪くしたクリムは、ついにはエニシダ刈りに身を落とす。そこには、妻の夢を叶えるはずだった夫から、ユーステイシアにとって屈辱的な姿になり果てたクリムの姿しかなかった。

‘But do I desire unreasonably much in wanting what is called life — music, poetry, passion, war, and all the beating and pulsing that is going on in the great arteries of the world? That was the shape of my youthful dream; but I did not get it. Yet I thought I saw the way to it in my Clym.’ (*The Return* 276; IV.VI)

ユーステイシアにとって「人生」とは「音楽とか詩とか情熱とか戦争とか、世界の大動脈で起こっている鼓動」を感じ取ることであり、クリムのなかには「それらに通じる道」があるとユーステイシアは信じていた。「素晴らしいことを知っているし、華やかな世界に出入りした男—つまり賞賛すべき喜ばしい、魅力ある英雄」として目の前に現れたはずのクリムが、今はすっかり落ちぶれてしまった様子に、ユーステイシアは自分の人生を台無しにされたと落胆する。クリムとの結婚でエグドンの牢獄から逃れる夢が潰えてしまった今、ユーステイシアが選んだのは、伯父の遺産を相続して金持ちになったワイルディーヴとよりを戻して、バドマスからパリへ逃げ出そうという駆け落ちの計画だった。クリムとの不仲以来、篝火を目印に再び逢瀬を重ねるユーステイシアとワイルディーヴの関係は、理性を欠いた「熱帯的な感覚」を与える破壊的なものだった。⁸ユーステイシアは、ワイルディーヴの男性的な魅力に「感情」をゆきぶられて恋愛対象としての好意を寄せるが、その男性の愚かな性質や欠点を冷静に見つめる「理性」も持ち合わせていた。大陸への逃避行を前にしたユーステイシアは、ため息を吐きながら「まるで地下から差し出た手によって雨塚の底に引き込まれでもしたように」エグドンの地

村で、ヨーブライト家とミストーヴァへ移住したヴァイ家、双方とも農民よりも上の階級に属しており、それぞれの家柄に対するこだわりがあったのである。

⁸ ワイルディーヴとの情熱的な関係が「熱帯的な感覚」であるのに対して、ユーステイシアとクリムとの冷えきった関係は「北極的な寒冷」に喩えられている。

にうづくまってしまう。

‘I can’t go, I can’t go!’ she moaned. ‘No money: I can’t go! And if I could, what comfort to me? I must drag on next year as I have dragged on this year, and the year after that as before. How I have tried and tried to be a splendid woman, and how destiny has been against me!...I do not deserve my lot!’ she cried in a frenzy of bitter revolt. ‘O the cruelty of putting me into this imperfect, ill-conceived world! I was capable of much; but I have been injured and blighted and crushed by things beyond my control! O how hard it is of Heaven to devise such tortures for me, who have done no harm to Heaven at all!’ (*The Return* 346; V.VII)

1895年版の『帰郷』では‘I can’t go!’のあとに‘He’s [Wildeve] not great enough for me to give myself to — he does not suffice for my desire!’という台詞が続く。⁹ユーステイシアはワイルディーヴに金銭面での援助を申し出ると、同行を許さないわけにはいかない。ワイルディーヴは自分を愛していても、「私が身を捧げるほど立派」でもなく「望みをかなえてくれる男でもない」。その男性の情婦として出奔することはユーステイシアの女性としての誇りが許さなかった。自分には豊かな才能があったのに、意地の悪い世界に投げ込まれて運命に翻弄された人生だったと、ユーステイシアは神に向かって反抗の叫び声をあげてシャドウウォーター堰に落ちて命を落とすのである。ここでユーステイシアが言った「意地の悪い世界」とは、エグドン・ヒースの世界にほかならない。「これは私の十字架で、恥辱で、やがて死になるでしょう」と、ユーステイシアはエグドンでの未来をすでに占っていたのである。

ハーディの作品ではユーステイシアのように、自己実現の夢が潰えた人物が、運命を呪う場面がよくみられる。『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*, 1895)のジュード・フォーリーは、大学に入り主教になるために勉学に励むが、身分と財産の壁に阻まれ苦しい挫折を経験し、従妹のスー・ブライドへ

⁹ 『帰郷』は1878年1月から12月まで『ベルグレイヴィア』に連載されて、その後、1878年に初版本(3巻本)が、1895年にユニフォーム版、1912年にウェセックス版が出版された。

ッドとの自由恋愛も因習に捉われてうまくいかない。シャドウォーター堰に落ちて命を落としたユーステイシアが、神に向かって自分の不運を嘆くように、ジュードは死を前にヨブ記を読みながら、自分の生まれた日を呪い続けるのである。ここで注意しなくてはならないのは、ユーステイシアがシャドウォーター堰に落ちて亡くなったのは、事故だったのか、あるいは、みずからの意思で飛び込んだのかという問題である。つまり、運命を呪っていたユーステイシアの死の謎は、読み手の解釈にゆだねられているのである。

While they [Clym and Wildeve] both hung thus in hesitation a dull sound became audible above the storm and wind. Its origin was unmistakable — it was the fall of a body into the stream adjoining, apparently at a point near the weir. (*The Return* 360; V. IX)

風雨のなかで聞こえた「鈍い音」は堰に身体が落ちた音であることは確かだが、ユーステイシアが自分の意思で流れに飛び込んだかどうかを全知の語り手が読者に伝えることはない。ユーステイシアは生きていくためにワイルディーズの情婦になるような人生は選択せず、自分の最期は自分の意思で選び取ろうとした可能性がある。一方で、自分にとって牢獄であり十字架であるエグドンの世界にそのまま飲み込まれる運命を覚悟したとも解釈できる。「夜の女王」の章でユーステイシアはエグドンの荒野での孤独な生活によって俗世間から離れて、それゆえに高い気位や品位が備わったという言葉があった。

Where did her dignity come from? [...] Among other things opportunity had of late years been denied her of learning to be undignified, for she lived lonely. Isolation on a heath renders vulgarity well nigh impossible. (*The Return* 70-71; I. VII)

つまり、ユーステイシアの威厳ある美しさを作り上げたのはエグドンの自然であり、ユーステイシアはその死をもって、ふたたびエグドンと一体となったといえるのである。

ユーステイシアの誤算は、パリ帰りの「帰郷者」クリムと結婚しても、エグドンのからの脱出や、華やかな都会暮らしを手に入れることができなかったことにあった。この閉塞感からの解放を求めて手にしたクリムとの結婚は

失敗に終わり、再びエグドンの牢獄に閉じ込められる悪夢にユーステイシアは絶望する。このヒロインの悲劇は男性の力を頼らなければ、現状打破はおろか、自己実現さえも困難な環境に置かれている点にある。女性としての誇りを捨てずに「理性」的に行動すれば、華やかで「感情」が満たされる世界から、ヒロインの人生は遠のいてしまう悲劇がそこにはある。ユーステイシアは、エグドンの荒野を彷徨う反抗的で愚かな娘から、人生をかけて不条理な運命に戦いを挑む、壮大な悲劇のヒロインへと成長したのである。

II. 帰郷者クリムの誤算¹⁰

パリで宝石商の仕事に嫌気がさし、都会の華やかな生活にも幻滅したクリムは、エグドンに帰還する。「何か理性的な」仕事を故郷で見つけて、再び田舎に根付こうと試みていたのだ。ユーステイシアの関心が外的な華美な世界へと向かったのと対極に、クリムの関心は内向的な精神生活へ向かい、エグドンに戻ってきたのである。パリ帰りのクリムは、都会の文化や進歩的な思想の洗礼を受けた「風変わり」な容貌の男性として村の人びとから見られていた。クリムはエグドンでの啓蒙活動を使命と考えており、牧歌的な環境を近代の知性を取り入れる社会へと変革しようとしていた。つまり、村人のあいだに「知識」を流布させることを計画していたのである。クリムは「未来の人間の典型的な顔つき」の青年であり、「人生を耐え忍ぶものであるとする人生観」を持つ「現代的な」人間だった。

In Clym Yeobright's face could be dimly seen the typical countenance of the future. [...] The view of life as a thing to be put up with, replacing that

¹⁰ ハーディの小説において「帰郷者」や「侵入者」は、多くの作品で扱われてきたテーマのひとつである。この作品における「帰郷者」はクリムであり、「侵入者」はユーステイシアである。「帰郷者」は生まれ故郷に戻る人物であるのに対して、「侵入者」は外部から田園地帯に都会的な価値観や享樂的な生活様式などを持ち込んで、土着の人びとに混乱をもたらす人物である。望遠鏡と砂時計を携えてエグドンに移住したユーステイシアは、異質な価値観で帰郷者クリムを翻弄する侵入者である。本章で扱う「帰郷者」とは、そもそも故郷に戻った時点で、以前の自分とは考え方などが本質的に変化しており、多くの場合、故郷に戻っても居場所がないため、故郷で生きる存在意義を新たに見出さなくてはならない人物である。

zest for existence which was so intense in early civilisations, must ultimately enter so thoroughly into the constitution of the advanced races that its facial expression will become accepted as a new artistic departure. People already feel that a man who lives without disturbing a curve of feature, or setting a mark of mental concern anywhere upon himself, is too far removed from modern perceptiveness to be a modern type. (*The Return* 167; III. I)

クリムにとって重要なのは、「文明の初期に強烈だった」という、「生きることへの熱い興味」や野望や情熱ではない。進歩をとげた人類に今後浸透していくに違いない「耐え忍ぶ」という観念こそが「文明人の表情」に現れる人生観であり、その表情をクリムは備えているというのである。「未来の顔」とは、「精神的苦痛の痕跡をとどめている」ものであり、クリムこそ時代を先取りした人間の顔をしているのだ。クリムは啓蒙活動を通して、自分を生んだエグドンの物質的繁栄や進歩のためにその変革を考えている。時代から取り残されたエグドンの現状を知らずに、半ば強引に改革を試みるクリムの存在は、土着の人びとにとっては、破壊をもたらす帰郷者としてしか映らない。クリムの取り組みを受け入れるには、田舎の世界では機が熟しておらず、村人を教化することは、時期尚早の試みであることがあきらかになる。('The rural world was not ripe for him. A man should be only partially before his time: to be completely to the vanward in aspirations is fatal to fame.' *The Return* 172: III. II)¹¹ クリムは「思想が肉体の病」であることを体現する苦悩する現代人であり、「思想」という寄生虫によって、その「美しさ」が蝕まれた人間である。

He already showed that thought is a disease of flesh, and indirectly bore evidence that ideal physical beauty is incompatible with growth of fellow-feeling and a full sense of the coil of things. (*The Return* 137; II. VI)

内面の苦悩が外部の均衡に影響を与えて、特殊な刻印がクリムの表情には刻

¹¹ 勉学や思索を重ねて反因習の気質を共有したジュードとスーの生き方や考え方は、時代を先取りしていた。当時は世間に受け入れられず、二人の関係は悲劇へと至る。これは、クリムの進歩的な思想がエグドンで受け入れられなかったことに通底する。

まれていた。パリでの虚飾に満ちた生活は、クリムを思索の世界へと向かわせて、徹底した禁欲主義的な精神を作り上げたのである。D. H. ロレンスは『トマス・ハーディ研究』のなかで、クリムはエグドンの植物が開花しようと苦闘するように、存在をかけて苦闘を続けながらも「人間」、「人類」、「地域社会」、「社会」、「文明」の枠組みで生きなければならないことに言及している。

His [Clym's] feelings, that should have produced the man, were suppressed and contained, he worked according to a system imposed from without. The dark struggle of Egdon, a struggle into being as the furze struggles into flower, went on in him, but could not burst the enclosure of the idea, the system which contained him. Impotent to *be*, he must transform himself, and live in an abstraction, in a generalisation, he must identify himself with the system. He must live as Man or Humanity, or as the Community, or as Society, or as Civilisation. (D. H. Lawrence, *Study of Thomas Hardy*)

太古の昔からじつと風雨や洪水に耐えて存在し続ける、抑制のきいたエグドン・ヒースは、クリムの禁欲精神と合致する。また、エグドンの地で生まれ育ったクリムはヒースを知り尽くしており、クリムはいわば荒野が作り出した人物で、ユーステイシア以上にエグドンと一体化していたのである。

If anyone knew the heath well it was Clym. He was permeated with its scenes, with its substance, and with its odours. He might be said to be its product. His eyes had first opened thereon; with its appearance all the first images of his memory were mingled; his estimate of life had been colored by it; [...] Take all the varying hates felt by Eustacia Vye towards the heath, and translate them into loves, and you have the heart of Clym. (*The Return* 173; III. II)

つまり、ユーステイシアのエグドンへの憎悪をすべて愛に変えれば、それがそのままクリムの心になるのである。エグドンの自然はクリムの忍耐と禁欲精神には適合するが、近代思想の洗礼を受けたクリムが、その思想を村人に還元しながらエグドンに帰属しようとする試みは、容易なことではなかったのである。

エグドン・ヒースへの愛着と嫌悪を含めて、多くの面に対極の性質を持つクリムとユーステイシアの結婚は、互いの認識不足と誤解から生じたものだった。エグドンで学校を開いて村人を啓蒙するパートナーとして、クリムが選んだのは、バドマスで教育を受け、知的さと明晰さを兼ね備えたユーステイシアだった。一方で、ユーステイシアはクリムとの結婚にパリでの夢の生活を重ねて、エグドン脱出の機会と捉えていた。互いが自分の欲望に集中しているため、それぞれの思惑にずれがあり、相手の思いを汲み取る余裕はまったくみられない。しかし、狂気の女性スーザン・ナンサッチがユーステイシアを魔女だと思って編み針で刺す事件や、仮装劇でトルコの騎士に扮したユーステイシアの魅力にクリムが気がつく過程を経て、二人の男女は理性を超えて惹かれあい、現実認識を曇らせるほどに本能的な力で結ばれたのである。クリムはやがて眼病を患い、磨りガラスを通したような不鮮明な状態で世界を見るようになる。クリムの視力の衰えは、自分以外の人間に対する理解や世界に対する視界が相対的に狭まっていくことを暗示する。クリムはユーステイシアと結婚してからというもの、村の人びとの教化どころかコミュニティからも家族からも離れて読書に耽り、孤立を深めていく。クリムにとって尊いことは内面を深める禁欲的な生活である。それは読書であり、エニシダ刈りであり、辻説教師なのである。大切なのは享乐的な価値観ではなく、自己の抛り所とする内面の充足なのである。クリムが殻に閉じこもるようになると、ユーステイシアはクリムとの関係に絶望し、再びワイルディーヴとの逢瀬を重ねて、当時のイデオロギーに対峙する男女関係の道を突き進み始めるのであった。

‘And how madly we loved two months ago! You were never tired of contemplating me, nor I of contemplating you. Who could have thought then that by this time my eyes would not seem so very bright to yours, nor your lips so very sweet to mine? Two months — is it possible?’ (*The Return* 249-50; IV. II)

2 か月前までは、気も狂わんばかりに愛し合ったクリムとユーステイシアとの関係はすっかり輝きを失ってしまった。「あなたは、私を飽きずに眺め、私

は私で、あなたのこと考えても飽きませんでした」とユーステイシアはクリムに向かって悲しみをぶつける。

クリムは、ユーステイシアとの結婚に失敗し、エグドンの原始の土地に文化や思想を持ち込む企てにも頓挫する。クリムは、自身を環境から切り離して疎隔の孤独の代償を払うことを決めた反逆の人間 (Howe 24) であり、それはジュードに通じる生き方でもあった。

ユーステイシアと同様に、クリムはプロメテウスの反逆児としての怒りを抱えているが、その鬱憤を表出することはなかった。¹²クリムにとって人間の生き様というものは、偉大といわれる身分であろうと下層の人間であろうと、そこに大きな差はないという諦念に基づいている。

Now, don't you [Eustacia] suppose, my inexperienced girl, that I [Clym] cannot rebel, in high Promethean fashion, against the gods and fate as well as you. I have felt more steam and smoke of that sort than you have ever heard of. But the more I see of life the more do I perceive that there is nothing particularly great in its greatest walks, and therefore nothing particularly small in mine of furze-cutting. (*The Return* 250; IV. II)

ユーステイシアがエグドンの嵐の中で自分の命を懸けてでも、神に対して最後まで抗い続けたのとは対照的に、クリムは人生経験を通してエグドンの世界で自己の世界に耽溺することの尊さを説いている。「飼いならすことができないイシュマエル」に喩えられたエグドンの風貌と同様に、頑迷で人を寄せ付けぬ強さをクリムは内に秘めているのである。

帰郷者クリムの誤算は、自分がパリで身につけた近代的思想を、故郷エグドンの無学な人びとの啓蒙のために役立てようという試みが、村の人びとやユーステイシアには快く思われず、実現には至らなかったことにある。都会の虚飾に耐えきれず、パリから故郷に帰還したクリムは、土着の人びとに対

¹² ユーステイシアもクリムもそれぞれに利己的で、己の欲望に向かって無鉄砲に突き進むという意味でプロメテウスの側面である。クリムのプロメテウスの側面は、知性で社会を変革しようという意識に基づいている。ユーステイシアは自分の感情や欲望に忠実に従い、運命に抗うという意味でプロメテウスの側面である。

して自分本位で教化を進めようとするれば、田園のコミュニティからは完全に浮いた存在となる。一度、故郷を離れた人間が再び故郷に戻れば、馴染みの土地に残るのは郷愁のみで、帰属すべき場所を見失った帰郷者は苦悩するのである。季節がめぐる円環の時間に生きる田園の人びとにとって、過去から未来へと直線的に流れる時間に培われた近代思想を受容することは、あまりにも時代を先んじていたのである。クリムは故郷の人びとの教化に挫折する悲劇を経験するが、それは「思想が肉体の病」だと苦悩する現代人を受け入れる段階まで、田園世界の「智」が熟していないからにほかならない。

Ⅲ. 村の人びと—ディゴリー・ヴェンとトマシ

恋愛がハーディの小説の登場人物を突き動かす支配的な動機となっている(Cecil 30)ことは、『帰郷』でもあきらかである。ユーステイシアは恋愛において理性的判断、現実的選択を誤り、運命(エグドン)の力に圧倒されるままに破滅の道を歩んだ。『帰郷』では、「土着の人間」と「帰郷者」、「田舎」と「都会」、「不変なもの(自然)」と「変化や崩壊」という対立構造のもとで物語は進む。悠久の時間が流れるエグドン・ヒースでは自然の均衡が保たれるが、それと対照的に、村に生きる人びとの生活は変化の連続である。¹³狭い田舎のコミュニティでの男女の別れ、不貞、裏切り、離婚、再婚を繰り返し、新たな恋愛や姻戚関係が生まれていた。

ユーステイシアが、ワイルディーヴとクリムという二人の男性の間で揺れ動き、ワイルディーヴは、トマシとユーステイシアという二人の女性を天秤にかけた。トマシはワイルディーヴとヴェン、それぞれと結婚をする。ユーステイシアやクリムは、恋愛や結婚が破綻すると人生にも絶望したが、

¹³狭いコミュニティにおける人間関係の流動性のみならず、エグドンの片田舎でも、ロンドンの都市生活者と同様に仕事や相続、階級問題が、登場人物たちの社会的地位や仕事に影響を及ぼしている。クリムは、パリでの宝石商の仕事を手放して、故郷エグドンに戻り教師を目指す。視力の衰えからエニシダ刈りとなり、最終的には辻説教師の道を選ぶ。ワイルディーヴは技師の仕事を手放して居酒屋の主人となり、その最期は水死だった。ワイルディーヴの寡婦となったトマシは、紅殻売りから農場主になったヴェンと結婚する。このような変化をともしなう社会構造で女性が生き抜くには、結婚相手の階級や職業や収入は重要な問題となる。

凡庸な村人のヴェンやトマシンは、困難を乗り越えた末に幸せをつかみ、したたかに荒野で生き延びていくのである。

ディゴリー・ヴェンは、羊の毛に目印をつけるための赤い顔料を売る紅殻屋として、エグドン・ヒースの荒野に神出鬼没の登場をする。頭の前から爪先まで、赤色の染料が身体に染み込んだ奇妙な風貌をしているが、誠実でまっとうな田園の人間である。密かにトマシンを愛しており、ワイルディーヴとトマシンの結婚がうまくいくように画策したり、ワイルディーヴがヨーブライト夫人から横取りした100ギニーを、トマシンのために賭博によって取り戻したりする。ユーステイシアとワイルディーヴとクリムが堰に飛び込んだ時に三人を水中から引きあげたのもヴェンだった。見返りを求めないトマシンへの純朴な愛と忠誠心を胸に、常にエグドン全体を見渡し（監視し）ながら、健全に生きる青年である。

The traveller with the cart was a reddleman—a person whose vocation it was to supply farmers with redding for their sheep. He was one of a class rapidly becoming extinct in Wessex, filling at present in the rural world the place which, during the last century, the dodo occupied in the world of animals. He is a curious, interesting, and nearly perished link between obsolete forms of life and those which generally prevail. (*The Return* 13; I . II)

ヴェンはエグドンに生きる人びとすべての人間関係を把握して、観察し、情報を収集して調整する人物である。紅殻屋はウェセックス地方でも消滅しつつある階級で、生物界でのドーデー鳥のような地位を田園世界で占めている。その職業の性質のみならず、ヴェンは田園の美德をすべて兼ね備えた特異な存在である。クリムのように思索もしなければ、悲運に弄ばれることもなく、現実を飼いなすしぶとさがあるヴェンは、最後には意中のトマシンを妻にすることでハッピーエンドをむかえる。コミュニティーの片隅に生きた孤独な人生から、祝祭の中心人物（新郎）となり、夫として父として社会の一員として新たな人生を再出発させるのである。ここで、ヴェンとクリムの人生の逆転現象が起り、クリムはユーステイシアとの結婚を契機に社会から距離を置いて孤独な人生を送ることとなった。人生の皮肉、節制や謙虚さが美

徳となりうることをハーディは読者に伝えているのである。

ユーステイシアが社会の慣習をもつともせず、自己流の大胆さでエグドンを闊歩していたのに対して、トマシン・ヨブライトはコミュニティからの疎外やスキミティライドのような社会的な制裁に異常なほどに敏感であった。書類の不備や異議申し立てにより、一度は滞った結婚を、時間をかけてでも押し通す意志の強さ、従順な妻として夫ワイルディーヴに尽くす健気さ、未亡人になるとヴェンの求婚に応じて再婚する変わり身の早さというように、時流に乗るしたたかさをトマシンは持ちあわせている。つまり、純真で可憐な容貌ながらも、危機を回避する能力に長けた浮ついたところのない現実的な女性なのである。「雨、闇、荒野の彷徨」の場面では、エグドンの荒れ狂う自然に対するトマシンの受け止め方は、あくまでも冷静であり、むやみに自然を恐れることはない。

To her [Thomasin] there were not, as to Eustacia, demons in the air, and malice in every bush and bough. The drops which lashed her face were not scorpions, but prosy rain; Egdon in the mass was no monster whatever, but impersonal open ground. Her fears of the place were rational, her dislike of its worst moods reasonable. At this time it was in her view a windy, wet place, in which a person might experience much discomfort, lose the path without care, and possibly catch cold. (*The Return* 355; V. VIII)

ユーステイシアにとってエグドンは死をも覚悟しなくてはならない恐るべき存在であった。しかし、トマシンはエグドンを怪物のように恐れる人がいることも理解したうえで、これはただの荒野であり、草むらや木の枝に敵意を感じることもない。トマシンにしてみれば、雨のせいでも風邪をひいたり、道に迷わないようにすることこそが大切なのである。

「後日物語」としてヴェンとトマシンの結婚を最後に付け加えたことで、当初ハーディが考えていたすべての人物が悲劇的な人生を終えるという壮大な田園の悲劇に牧歌的ロマンスの色合いが付与されることになった。¹⁴あく

¹⁴ 『帰郷』1912年版、第6巻注にて、ヴェンとトマシンの結婚は無理に付け加えたもので、本来、意図していなかったことが言及されている。

までもエグドン・ヒースの主役はユーステイシアとクリムであって、ヴェンやトマシンの物語は付随的で、エグドンの人びとの暮らしの一端を飾るにすぎないのである。ただ、同じエグドンに生きてドラマティックで悲劇的な生き方をしたユーステイシアとクリムに対して、凡庸ながらも、したたかに人生を送ったヴァイとトマシンの生命力の強さを提示していたのである。

結語

『帰郷』では、クリム、トマシン、そしてヴェンが作品の最終章まで登場し、田園で素朴に生き続ける人物として描かれた。ハーディの当初の構想ではヴェンはヒースの荒野に消え去り、トマシンは未亡人として、クリムはエグドンの丘で辻説教師として、それぞれが孤独に生きる結末が用意されていた。しかし、最終的には月刊誌連載小説らしく、田園に生きるヴェンとトマシンの友情に基づいた祝婚物語の牧歌的ロマンスとして作品は幕を閉じる。ハーディ初期の作品『狂乱の群れを離れて』(*Far from the Madding Crowd*, 1874)では、奔放なヒロインのバスシバ・エヴァディーンは、ヒロインを見守り続けた牧人のゲイブリエル・オークと結婚する。オークはヴェンと同様に田園の美德を備えた人物で、堅実な友愛によってバスシバとオークが幸せをつかむ牧歌的なロマンスとして作品は完結する。ハーディの悲劇作品の特徴は、あくまでも壮大な悲劇を動かす主人公たちが小説の軸となっていて、田園に生きるユーモラスな村人たちは、ほんの脇役として登場するにすぎない。『帰郷』でクリムが近代の憂鬱に取りつかれて人生に苦悩し、ユーステイシアが不可抗力な運命の不条理さと対峙するとき、村人たちの牧歌的世界観は物語の隅に追いやられてしまう。田園は理想化された美しく牧歌的なものから、時には自然は猛威を振るう恐るべき存在として、登場人物の人生と深くかわりを持つようになる。エグドン・ヒースは、クリムにとっての故郷となり、ユーステイシアにとっての牢獄となり、それぞれの人生や運命を左右しながら絶大な力で男女の悲劇に影を落としているのである。エグドンの荒野は物語の舞台であると同時に、そこに生きる人びとすべてを飲み込み支配する、まるで意思を持った生き物のような存在なのである。

参考文献

- Beer, Gillian. "Can the Native Return?" *Open Fields: Science in Cultural Encounter*. Oxford: Oxford UP, 1996. 31-54.
- Boumelha, Penny. "Introduction." *The Return of the Native*. London: Penguin, 1999. xix-xxxi.
- Brooks, Jean R. "The Return of the Native: A Novel of Environment." *Thomas Hardy*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea, 1987. 55-72.
- Cecil, David. *Hardy the Novelist: An Essay in Criticism*. London: Constable, 1954.
- Deen, Leonard W. "Heroism and Pathos in *The Return of the Native*." Ed. R. P. Draper. *Hardy The Tragic Novels*. London: Macmillan, 1975. 119-32.
- Gatrell, Simon. "The Return of the Native: Character and the Natural Environment." *Thomas Hardy and the Proper Study of Mankind*. London: Macmillan, 1993. 42-49.
- Gibble, Jennifer. "The Quiet Women of Egdon Heath." *Essays in Criticism* 46 (1996): 234-57.
- Gindin, James, ed. *The Return of the Native*. London: Norton, 1969. 405-24.
- Gregor, Ian. "Landscape with Figures: *The Return of the Native*." *The Great Web: The Form of Hardy's Major Fiction*. London: Faber, 1974. 77-109.
- Hardy, Thomas. *Far from the Madding Crowd*. 1874. Ed. Rosemarie Morgan. London: Penguin, 2000.
- . *The Return of the Native*. 1878. Ed. Tony Slade. London: Penguin, 1999.
- . *Jude the Obscure*. 1895. Ed. Dennis Taylor. London: Penguin, 1998.
- Howe, Irving. *Thomas Hardy*. London: Weidenfeld, 1968.
- Ireland, Ken. "From Jewels to Furze: Transience and Permanence in *The Return of the Native*." *Thomas Hardy, Time and Narrative, A Narratological Approach to His Novels*. Basingstoke: Macmillan, 2014. 70-85.
- King, Jeannette. *Tragedy in the Victorian Novel: Theory and Practice in the Novels of George Eliot, Thomas Hardy and Henry James*. Cambridge: Cambridge UP, 1978. 102-05.
- Laurence, D.H. "The Psychology of the Characters." *Study of Thomas Hardy. Selected Literary Criticism*. 1936. Ed. Anthony Beal. *The Return of the Native*. Ed. James Gindin. London: Norton, 1969. 416-22.
- Lothe, Jakob. "Variants on Genre: *The Return of the Native, The Mayor of Casterbridge, The*

- Hand of Ethelberta.*” Ed. Dale Kramer. *The Cambridge Companion to Thomas Hardy*. Cambridge: Cambridge UP, 1999. 112-29.
- Meisel, Perry. *Thomas Hardy: The Return of the Repressed*. New Haven: Yale UP, 1972. 68-89.
- Miller, J. Hillis. *Thomas Hardy: Distance and Desire*. Cambridge: Harvard UP, 1970. 68-89.
- Morgan, Rosemarie. *Women and Sexuality in the Novels of Thomas Hardy*. London: Routledge, 1988. 58-83.
- Paterson, John. “An Attempt at Grand Tragedy” Ed. R. P. Draper. *Hardy The Tragic Novels*. London: Macmillan, 1975. 109-18.
- . ‘The “Poetics” of *The Return of the Native*.’ *Modern Fiction Studies*, vol. IV, no. 3 (Autumn 1960): 98-104.
- Turner, Paul. *The Life of Thomas Hardy*. 1998. Oxford: Blackwell, 2001. 57-65.
- Wolfreys, Julian. “Being and Dwelling: *Far from the Madding Crowd* (1874), *The Return of the Native* (1878), *Two on a Tower* (1882).” *Thomas Hardy*. Basingstoke: Macmillan, 2009. 95-134.
- The Athenaeum*. November 23 (1878). *The Return of the Native*. Ed. James Gindin. London: Norton, 1969. 405-06.